

入選

ちっぽけな勇気で

青森県 北辰中学校

三年 山崎 怜奈

「荷物、持ちましょうか？」

どうしてあのときは、こんなにも簡単なひとことが言えなかったのだろうか。ずっと悔やんでいた。それは、ある暑い夏の日のことだった。下校中、大きな荷物を抱えた年輩の女性を見つけた。その人は、道の端を何度も立ち止まりながら、ゆっくりと歩いていた。

声をかけて、荷物を持ってあげようと思い、心の中で考えた言葉を何度もくり返した。しかし、くり返しているうちに、断られたらどうしようとか、無視されたらどうしようとか、いやな考えがいくつも浮かんできた。

気づけば私は、その人の後ろをうつむきながら歩いているだけになっていた。いつもは短い帰り道が、その日はとても長く感じた。数分歩いた頃だろうか。その人が突然立ち止まった。なんだろうと思い顔を上げると、そこはバス停だった。そのままバス停を通りすぎようとする、なぜだか足が固まって、その場に立ちすくんでしまった。

すると、年輩の女性が、

「大丈夫？ 具合悪いの？」と声をかけてくれた。その人は心配して声をかけてくれたのに、なぜ私は最後まで荷物を持ってあげられなかったのだろうと思うと、途端に悔しい思いが込み上げてきた。その女性に「大丈夫です。」と答えて、逃げるようにその場を立ち去った。

そんな思いをしたあの日から、私は出かけると、困っている人はいないか探すようになった。しかし、探してみるとそういう人は見当たらないもので、あの日から2年がたってしまった。そして、最近やっとその日が来たのだ。

家族といっしょに買い物に出かけたときのことだ。私は一人で、ゲームセンターに入った。入ってすぐにポップコーンマシンの近くで、困っているのではないかという人を見つけた。あの日のように、「不安」が込み上げてくる前に、その人に声をかけた。「大丈夫ですか。」と。するとその人は、

「孫にあげたいんだけど、このポップコーンの作り方がわからなくて。」

と言った。さっきよりも声に力を込めて、

「私が作りましょうか。」と言うと、その人は、

「いいの？ じゃあ、お願いするね。」

と言った。こんなことは今まで一度もなかったのも、一所懸命にポップコーンを作った。できたてのポップコーンをその人にわたすと、喜んで、

「ありがとう。」

と言ってくれた。今まで言われた中で、一番気持ちがよい「ありがとう」だった。親切とはこんなにも気持ちがよいのだと思った。

少しの勇気、それは私にとっては、声をかけることであった。